たとえリセットされても

ロボットも大切な友達

４年　Ｅ・Ｏさん

主人公の愛は、心の病気になったお母さんのために作られた、医療用ロボットです。お母さんが一番幸せだったころの、小学四年生の女の子のすがたをしています。「愛はおかあさんのためにいるのだから」と考え、いつもお母さんの言いつけを守っています。でも、これは愛の気持ちではなく、常にお母さんのためになる方を選択するよう、プログラミングされているからだと思います。愛はロボットなので、感情をもちません。

先日、大阪・関西万博を特集する番組で、いろいろなロボットが紹介されているのを見ました。自動運転バスや、同時通訳をする人工知能などがある中で、わたしは、人型ロボットが気になりました。いっしょにバスケットボールをするものや、車いすを押してくれるもの、話を聞いてくれて、いっしょにおしゃべりを楽しめるものなどです。このように、ロボットは、わたしたちの生活を便利にしてくれるものから、人と共生し、わたしたちの心を豊かにしてくれるものへと変わってきているそうです。わたしは、この本に出てくる愛と同じだな、と思いました。

人と共生するロボットは、わたしたちにとって、必ずしも必要ではありません。でも、柚果は一人のさびしさから救われたし、大樹は心にしまっていたつらい過去を打ち明けることができました。また、はるねは自分の気持ちに気づき、素直になることができました。そんな三人は、愛を助けるため、必死に協力します。これは、人間同士の友達関係と同じではないでしょうか。

人は、友達がいなくても生きていけます。でも、もし友達がいなかったら、わたしは大好きなわとびをしていても楽しくないし、けがをしたときに誰もかけよってくれません。また、ライバルもいないので、成績も下がってしまうかもしれません。

時にはぶつかることもあるけれど、友達といっしょにすごすと、わたしたちは一人では見られなかった世界を見たり、一人では気づかなかった自分に気づくことができます。そして、自分は大切な存在だと実感することができます。感情をもたなくても、そのことを気づかせてくれた愛は、みんなにとってもう友達と言える存在だと思います。